

# 「学習の場の再生」

日本ナレッジ・マネジメント学会 理事・学会誌編集委員長  
近畿大学経営学部 教授 筒井万理子

私たちのライフスタイルは、COVID-19 との戦いのために大きく変わりました。あれができなくなった、これがなくなったと愚痴を言っても仕方ないことは分かっていますが、ちょっとだけ言わせてください。

私の場合は、調査企業でのヒアリング(色々なお話をお聞かせいただき嬉しい)、大教室での講義(時々受講生にも登壇してもらうのが楽しい)、ゼミの飲み会(ゼミ生と呑めて楽しい)、教職員の歓送迎会(普段真面目な先生もベロベロ。楽しい)、仲の良い友人との女子会(年齢的に婦人会かもしれません。当然楽しい)、などなど。挙げたらキリがないですが、なくなって一番困っているのが、同僚や研究仲間との雑談です。大学の廊下や食堂で、学会の懇親会や2次会の居酒屋で、お会いする方々との雑談は私にとって、とても大事なものでした。

「雑談」が大事だったなんて、意味不明ですよね。でもその理由をお読み頂いたら、学会員の皆様にご理解いただけたらと思っています。

私にとって、同僚や研究仲間との雑談は、研究者の実践共同体への参加であり、学習の場でした。学びの場が無くなったのです。これは一大事です。

実践共同体とは、「共通の専門スキルや、ある事業へのコミットメントによって非公式に結びついた人々の集まり(Wenger, McDermott and Snyder, 2002 邦訳 12 頁)」です。この定義の出所である Wenger, McDermott and Snyder (2002) による名著『Cultivating Communities of Practice』の日本語版は『コミュニティ・オブ・プラクティス』(野村恭彦先生監修、櫻井祐子先生訳、解説は野中郁次郎先生!)として出版されています。蛇足ながら、当時大学院生だった私は原著を数か月かけてなんとか読み終えた直後に「筒井、例の本の日本語版が出版されたらいいよ」と聞かされた時は、私の数か月は一体・・・と思いました。もちろん原著に取り組むことは非常に良いことですし、出版された邦訳本は、それはそれは素晴らしいものでした。

閑話休題。実践共同体は学習の場です。私は同僚や研究仲間から、多くの事柄を学ばせていただきました。この研究に強いのは〇〇さんの研究グループ、最近気になるジャーナルはこれ、といった具体的なものから、「私が筒井さんの年齢の頃に取り組んでいた事」や「私の一日の時間の使い方」など、内省するきっかけをいただくようなものまで、幅広く学ぶことができたのです。『コミュニティ・オブ・プラクティス』でも、実践共同体における関心の範囲は幅広く、「極めて日常的なノウハウ(例えば健康的な食生活)から、高度に専門化された職業上の専門知識(航空機の翼の設計など)に至るま

で、さまざまである(邦訳 66 頁)」と説明されています。

ここまでお読みくださった学会員の皆様も、私と同じようなご経験(何らかの実践共同体に参加することで学習をする)をお持ちの方は多いのではないのでしょうか。そして COVID-19 前の雑談を懐かしむ私に共感していただけたのではないのでしょうか。

さて、長い泣き言を聞いていただきましたが、嘆いてばかりでは進歩がありませんね。COVID-19 が収束した後も、すっかり以前の生活が戻ってくる保証はありません。いま多くの会議はオンラインで開催されています。私たちは会議場所への移動の負担が無いのでとても便利であることに気づいてしまいました。COVID-19 収束後もちょっとした会議などはオンラインで開催されるようになると予想されます(会議後の雑談が楽しいのに!)。私たちが行うべきことは、COVID-19 によって脆弱になった大切な人とのつながりを、ふたたび何らかの方法で復活させることではないのでしょうか。日本ナレッジ・マネジメント学会では ZOOM のブレイクアウトルーム機能を活用して学会員同士でお話する機会を設けて下さっています。これは学会員のつながりをつくる施策のひとつと理解しております。ようやく、本エッセイのタイトル、「学習の場の再生」に落ち着きました。ここまでたどり着くまで脱線しました。お読みいただきありがとうございました。

なお、ご承知の通り、野村恭彦先生のエッセイは本学会メールマガジン第 137 号(2021/2/8)に掲載されています。また、本学の学会員でいらっしゃる松本雄一先生の実践共同体に関するご研究をまとめられたご著書が日本経営学会賞(著書部門)研究奨励賞をご受賞なさったことについては本学会 HP で紹介されております(<https://www.kmsj.org/news/2021/04/n-1261/>)。

次号のリレーエッセイのバトンは、会社経営者であり大学院大学教授、そして本学会では新産業革命研究部会長をなさっている田原祐子先生にお渡しいたします。